

宗岡二中だより 10月号



令和 7 年 10 月 1 日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

自分の弱さと向き合い、それを大事になさい。

校長 伊藤大輔

「強くなることはないです。弱い自分に苦しむことが大事なことなんです。人間はもともと弱い生き物なんです。それなのに、心の苦しみに逃げようとして、強くなろうとする。強くなるということは鈍くなるということなんです。痛みに鈍感になるということなんです。自分の痛みに鈍感になると、人の痛みにも鈍感になる。自分が強いと錯覚した人間は他人を攻撃する。痛みに鈍感になり、優しさを失う。いいんですよ、弱いまままで。自分の弱さと向き合い、それを大事になさい。人間は弱いままでもいいんですよ。弱い者が手を取り合い、生きていく社会こそが素晴らしい。」あるドラマで、いかりや長介氏(1931-2004 コメディアン、ミュージシャン、俳優等幅広く活躍した)が演じる弁護士役のセリフです。

私たちは日々、様々な感情を抱き、それと向き合いながら生きています。しかし自分の感情をコントロールするのは、なかなか難しいものです。「強く、明るい」自分を見せることはできても、周囲の目をことさらに気にしてしまい、「弱く、暗い」自分をさらけ出すことができずに、大きなストレスを抱え込むこともあるのではないのでしょうか。

同年代の友人をはじめ、あなたの周囲にいる人々も、あなたが放つ「強く、明るい」面を見つけては、ほめてくれたり、認めてくれたりすることが多いはずです。強く明るい振る舞いは目立ちますから、評価しやすいのです。しかし、このことだけが強調されると、評価を受ける側は「よくできた」自分だけが見られ、「なかなかできない」自分は、どこかに取り残されたように感じます。何ともいえない不安な気持ち募(つの)っていきます。

そして、このように抱えた不安や悩みを放置したり、弱さや暗さも含んだ感情に蓋(ふた)をしていると、負の感情は沈殿(ちんでん)します。その結果、突然爆発したり、その重さに押しつぶされてしまっ

たりすることになります。だからこそ、弱さと向き合う勇氣が必要なのです。

弱さに向き合う勇氣は学ぶ姿に表れます。つい先日、校内を巡りながら、数学の授業を参観しました。計算問題に取り組む場面でした。ある生徒が途中で計算に誤りがあることに気付きます。ノートには、誤りを導いた途中式が残っています。皆さんならば、誤りに気付いた時点で、どんな行動を起こしますか。消しゴムで途中式を消しますか。消しませんか。この生徒は、消しゴムは一切使わずに、余白に違う色のペンで計算式を書き始めました。間違いを消すのは当たり前だと思う人は、なぜ消すのでしょうか。ノートをきれいに使うためですか。しかし、それは大変もったいない行為です。肝心なことが消えるからです。誤った原因が消えるのです。途中式に潜む思考の跡が消えるのです。誤りの痕跡を残した、この生徒は授業後に自分の弱さにじっくりと向き合えます。現状を受け止め、自分を大切に育てようとする心根の強さを垣間見た瞬間でした。

弱さへの向き合い方は集団の在り方にも表れます。やみくもに「強がる」者同士が足を引っ張り合う集団よりも、弱さを受け止めた者同士が力を合わせて作る集団のほうが、はるかに強靱(きょうじん)です。気を付けたいのは「弱さを認めること」と「弱さに逃げること」とは別物だということです。弱さを認める人は自分を知らうとする人です。弱さに逃げる人は自分を遠ざける人です。強がる人と変わりません。

さて学校の一年も中間地点を迎えます。授業、行事、部活動・・・それぞれの営みを通じて人と関わり合う中であって、慣れや緩み、時には歪(ひずみ)が生じる時期でもあります。このことを気にかけてつ、宗岡二中の皆さんには、自分の弱さと向き合い、相手の弱さを受け止めながら、しなやかな強さを培ってほしいと切に願っています。